日本語學研究　第30輯 (2011. 03. 20. pp.105~126)

「－的」の日本語化

金曙泳*

〈 要 旨 〉

本稿では，主に「-的」の連体用法における変遷を中心に考察し，「-的」が中国語から日本語になっていく過程を概観した。まず，近世･近代初期における「-的」の実際の用法を中国俗語文学における用法と比較し，その影響と「-的」の用法を整理した。また，明治期における「-的」の用法を，翻訳書と非翻訳書に分けて調査し，西洋文献の翻訳語による影響とその用法に関して考察を行った。

このような考察によって，近世末から明治期における「-的」をその用法の変遷より，「a-原型」「a'-借用」「b-過渡」「c-安定」といった四つのプロセスに区分することが出来た。また，日本語における「-的」の用法は，中国俗語文学から借用され，明治期にかけて中国俗語文学における訓読･翻訳と西洋文献の翻訳語などの影響を受けて，日本語化されたことが分かった。さらに詳しくいうと，「-的」は発生当時から“形容動詞”として日本語に導入されたのではなく，近世末から明治期の中で“形容動詞”のように変容した語であって，いわゆる“一般の形容動詞”とはことなる用法を多数有する。本稿ではこのようは「-的」を「擬似形容動詞」と呼んで区別した。

論 文 分 野 ：語彙論(語構成)・文法(統語論)
キーワード：的，「-的」の発生，形容動詞，漢語系接尾辞，擬似形容動詞

1. はじめに

日本の近代には新漢語が多く生まれ，修飾の際に抽象的な意味を持たせる「－的」「－性」「－風」「－式」などが多く使われるようになった。その中でも，“道徳的･合法的”など，「－的」の使用が最も著しく，今日に至ってはその優れた造語力によってさらに使用が拡大されている。本稿では先行研究を踏まえて，「－的」の用法の変遷を通時的に考察して，このような「－的」の起源と受容と「意味機能[1)]」に関して検証を行いたい。

2. 研究の枠組み

2.1 先行研究及び問題提起

＊ 大阪大学大学院 文化表現論専攻・専門分野 国語学，博士後期課程

1) 本稿における「-的」の「意味機能」は，「-的」自体の意味だけでなく，「-的」の用法による句(文･文章)のコンテクストにおける意味を含む概念で，語義とは区別する概念である。

これまで漢語系接尾辞「－的」に関する研究は多く行われてきたが，その中でも最も多く行われた研究は「－的」の起源及び受容に関する研究[2]であった。

その中で前田(1960)は「－的」の起源に関して，具体的な用例をいくつか引いて，近世における中国の白話小説などの俗語文学(以下，中国俗語文学)の影響であると述べた。

> (1)「的」の出現は，今のところせいぜい幕末までしかさかのぼれないが，寛政から宝暦へ，この五十年間は我が国においてシナ語の研究が盛んで，大陸の俗語文学が広く読まれた時代である。そしてそれは「的」を頻用する文学でもあった。その愛読者たちがその「的」をまねて洒落っ気を発散させたろうと推測しても，突拍子とはいえまい。
>
> 前田(1960:82)

また，山田(1961)は明治初期の新聞・雑誌などの資料から「－的」の用例を挙げて発生期における「－的」に関して述べている。同氏はここで，明治初期の「－的」の用法を(2)のように中国俗語文学における用法と現代語的な用法とに区別した。後者の用法は学者や翻訳家によって，主に学術書や学術用語集などで使われ，形容詞が乏しい日本語の事情[3]と漢語の高い生産力によって，以後多く使われるようになったと述べている。

(2) **a. 中国俗語文学における用法**

→ 官吏のことを官的，土左衛門のことを土左的と表現するなど，人名の一部を取って，的を用いる。

1) 妓們相顧ミテ道，那ノ客ヘ毎(イツモ)讌坐長的(ナガイ子ユ)

2) 班児道，真箇不忍住的(マコトニタマラナイ子)，虎-児道，那後ハ恁般的(アノアトハドウデシタ)

『松本万年新稿雑記第一編』明治11年(1878)（山田1961:242)

3) 何んにしろ並の土左的では無いといふ評判跡は明日委しく記し升

『仮名読新聞』明治10年(1877)，03月30日

b. 現代語的な用法

→ 西洋語の訳語として，形容動詞のように用いる。

1) 今政事学ト政略トノ関係ハ此兵家ノ戦法ト戦略トノ関係トモ異ナリテ，全ク観察的ト実行的トノ区別ナリトシ，又一ニハ道具立ヲ知ル事ト道具立ヲ用ユル事トノ関係ナリトス。

『政略論』其一，西周，明治5･6年(1872･1873)
(山田1961:243)

一方，広田(1969)は山田氏と見解を同じくしており，磯邊(1906)が紹介した『復軒雑纂』を再び紹介したが，同氏はその翻訳家グループ[4]による著作で「－的」の用例を見つけることはできなかったと述べて

---

2) 磯邊彌一郎(1906)，前田勇(1960)，山田巌(1961)，広田栄太郎(1969)，堀口和吉(1992)など。

3) …… 日本語に形容動詞がすくないということも，いろいろな方面から指摘されていますが，これが，的の氾濫に拍車をかけている事実もまた争えません …… 藤居(1957:72)

4)『復軒雑纂』大槻文彦，明治35(1902)(『復軒雑纂1―国語学・国語国字問題編』2002：250-252)

いる。

しかし，このような研究のほとんどは一部の限られた用例に対する考察であって，管見の限り明治期全般における用例を幅広く収集して考察を行った研究はない。また，前述したように多くの先行研究が『復軒雑纂』の記述(3.2節の(15)など参照)を言及して，「－的」は近代に至って英語の「˜tic」などの翻訳に多く使われて広まったと述べているが，それに関する検証も未だに不十分である。さらに，近世の「－的」と近代の「－的」の関連性を通時的に考察した研究も十分に行われてない。

本稿では先行研究を踏まえ，明治期における資料をより幅広く収集して，主に「－的」の語構成，その中でも「－的」の用法をより細かい基準に従って分類・考察する。

2.2 研究の目的

本稿では，近世と近代における「－的」の用法を比較しながら通時的に考察した上，多くの先行研究に引用されたが未だに実際の検証が不十分である『復軒雑纂』における「－的」の記述を検証して，「－的」における翻訳語の影響を実証的に考察する。このような一連の考察によって，日本語における「－的」の起源及び受容過程が明らかになると考えられる。

また，このような考察を行うに際して，「－的」の「意味機能」を明らかにするために明治期全般にわたる「－的」の用法・活用の分析とする。このような「－的」の用法の変遷に関する分析は，「－的」がいつから“形容動詞”のような用法をもつようになったのか，また，そもそも「－的」が本当に“形容動詞”であると判断できるのかという，「－的」の品詞性を検討するに際しても重要な役割を果たす研究になると稿者は考える。

2.3 調査文献・資料

本稿における主な調査対象は，明治元年から大正5年に至るまでの合計310件(翻訳書84件･非翻訳書226件)のテキストで，その時期別分布は表1のようである。詳しい目録は5.2節に載せた。

表1　調査テキストの時期別分布

時　代 / テキスト	①明治 元年～09	②明治 10～19	③明治 20～29	④明治 30～39	⑤明治 40～大正05	計
翻訳･非翻訳書	24	24	174	43	45	310

凡例) 雑誌の場合，個々の記事を別々にカウントした。
そのために雑誌『太陽』が含まれている③期の場合，項目が多くなったが，言語量における偏りはない。

……善く飜譯をして居たは，柳河春三，**桂川甫策**，黒沢孫四郎(**河津祐之**の事)，箕作奎五(菊池大麓君の兄さん)，**熊沢善庵**，其他 ……

表2翻訳テキストのジャンル別分布

区分	翻訳書					
時代 / NDC	明治 元年～09	明治 10～19	明治 20～29	明治 30～39	明治大正 40～05	計
00 総記	0	0	12	0		12
10 哲学		0				0
20 歴史	1					1
30 社会科学	0	3				3
40 自然科学	0	4	1	0		5
50 技術･工学	2					2
60 産業	1					1
70 芸術･美術						0
80 言語			0			0
90 文学	11	9	14	22	4	60
-- 分類外						0
計	15	16	27	22	4	84

表3　非翻訳テキストのジャンル別分布

区分	非翻訳書					
時代 / NDC	明治 元年～09	明治 10～19	明治 20～29	明治 30～39	明治大正 40～05	計
00 総記	1	3	117	2		123
10 哲学		2				2
20 歴史	1					1
30 社会科学	4	1				5
40 自然科学	3	1	2	1		7
50 技術･工学	0					0
60 産業	0					0
70 芸術･美術						0
80 言語			1			1
90 文学	0	1	27	18	41	87
-- 分類外						0
計	9	8	147	21	41	226

凡例) テキストは各所蔵図書館の「日本十進分類法(NDC)」によって分類したが，以下の場合は稿者の任意で分類した。

1) 雑誌(『太陽』など)は「日本十進分類法(NDC)」によると「00総記」になるが，収録記事が小説の場合は「90文学」に分類するなど，記事の内容によって細かく分類した。

2) 雑誌を含め，評論集(『近代評論集』1)の各記事･評論は一つで数えた。

3) 所蔵図書館の分類より相応しい分類があると判断される場合，後者に従う。

また，表2と表3のように翻訳と非翻訳テキストを選定するのに際して正確な比較のために，量的な面からジャンル面まで可能な限り偏差を少なくしようとした。それに加えて，一部には例外があるものの[5]，信頼性と一貫性を保つために，典拠不明のテキストは排除し，主に全集類を中心に取り入れた。

2.4 分析方法

「－的」の起源及び受容における中国俗語文学と西洋文献の翻訳語などの影響を確認するために，近世･近代初期における「－的」の用法を中国俗語文学における用法と比較し，さらに明治期における「－的」の用法を翻訳書と非翻訳書に分けて，明治元年から大正5年に至るまで刊行年を約10年単位に区切って考察を行う。

また，近世から明治期にわたるテキストを幅広く収集し，主に「－的」の語構成，その中でも後部要素，即ち「－的」の用法と活用を細かい基準に従って分類して考察する。まず，「－的」の用法を統語論的に「装定」「述定」「その他」に分類し，さらに文の中での「意味機能」によって「装定」を「連用用法」「連体用法」に分類し，それぞれの用法を活用別に⑶のように分類した。

⑶**a. 装定用法**
　1) 連用用法：㋐「－的＋ニ」，㋑ 語幹
　2) 連体用法：㋒「－的＋ナ(ル)」，㋓「－的＋ノ」，㋔語幹，㋕その他
b. 述定用法：㋖語幹，㋗その他
c. その他：㋘その他

その詳しい用例は以下の⑷のようであって，今回調査したテキストにおける統計資料は3.2節の表5・表6である。

⑷**a. 装定用法**

1) 連用修飾用法(以下，連用用法)

㋐「ニ」連用用法：「－的＋ニ＋被修飾語」

大ニ道徳的ニ根攄シテ人血ヲ流サズシテ ……

『仏国革命史･3巻』明治9年(1876)2頁

㋑「語幹」連用用法：「－的＋被修飾語」

而シテ社会ニ特別ノ負担ヲ課スルノ必要ナルニ当テハ可成的之ヲ平等ナラシメ以テ政治上ノ理由ヨリ看テ一モ苛虐ト為ス可カラサルガ如キ方法ニ従ヒ法律ヲ以テ之ヲ督制セサル可カラス ……

『政府権限論』明治17年(1884)

2) 連体修飾用法(以下，連体用法)

㋒「ナ(ル)」連体用法：「－的＋ナ(ル)＋被修飾語」

…… 己ヨリモ才能モ勝レ，事務ニモ熱シタル者アリテ，其議論ノ公正的ナルニ感発シ，次

5) 後節でまた述べるが「－的」の起源に関する『復軒雑纂』(大槻文彦，1901)の内容を検証するため，著者を含め一連の翻訳者たち(柳河春三，桂川甫策，黒沢孫四郎(河津祐之)，箕作奎五，熊沢善庵など)の翻訳書は原作の言語・国籍を問わなかった。

第に其見識ヲ高尚ナラシメ ……　『代議政体』明治8年(1875)142頁

㋓「ノ」連体用法：「－的＋ノ＋被修飾語」

此予言的ノ論説ハ少シク議会ヲ感動セシカドモ ……

『仏国革命史･3巻』明治9年(1876)20頁

㋔「語幹」連体用法：「－的＋被修飾語」

千七百九十三年ノ民政的憲法ヲ設立シ当路ノ官吏ヲ免シテ之ヲ捕縛シ ……

『仏国革命史･3巻』明治9年(1876)38頁

㋕ その他

明瞭である事，　論理的であること等は，　皆此自然である事に伴ひまする。

雑誌『太陽』「国語研究に就て」明治28年(1895)1号

b. 述定用法

㋖「語幹」述定用法

商人等ハ革命政府ヲ以テ唯暫時的ト見做テ其永続スベキヿヲ疑ヒケレバ ……

『仏国革命史･3巻』明治9年(1876)31頁

㋗ その他

デムーランハ革命的ニシテ乗権官アル政治ヲ攻撃スルヲ以テ ……

『仏国革命史･3巻』明治9年(1876)51頁

c.「その他」

㋘ その他

只ダ見ル前崖樹木ノ欝葱タル処ヨリ，一個ノ悪鬼的一個ノ猛士的ト現出スルヲ ……

『泰西活劇春窓綺話』明治11年(1878)489頁

※「悪鬼的」と「猛士的」の両用例は，一見被連体修飾語「人」が省略された用法だと考えられやすいが，この場合は，同頁の挿絵をみても「的」が名詞のように「人」という意味･用法を果たす用法であって，「残存用法」であると判断できる(第3節参照)。

3.「－的」の日本語化

3.1「－的」における中国俗語文学の影響

本節では中国俗語文学における「－的」の用法から考察することにするが，まず楊超時(2009)は中国語の白話小説で見られる「－的」の用法を以下(5)のように述べた。

(5)a. 名詞の後ろに付き，所有を表すもの。

b. 種々の品詞や句の後ろに付いて，連体修飾語となるもの。

c. 形容詞や副詞の後ろに付いて，連用修飾語となるもの。

d. “地”のかわりに使う用法である。

e.「“的”構造[6]」になって，前の中心語を体言化するもの。　楊超時(2009：135)

6) 楊超時(2009)における「“的”構造」は「“語基”或いは“語基”にあたるもの＋“的”」という構造を示し，本論文

一方，諸橋轍次『大漢和辞典』が説く「－的」の用法は以下⑹のようである。

⑹［的］助辞。俗語で，名詞・動詞・形容詞・副詞に添へて用ひる。宋の語録などに低・地などを用ひるものに同じ。
a. 形容詞に添へる助辞「もの」。貴的(貴いもの)
b. 接続の助辞「の」。
c. 所有をあらわす助辞「の」。低とも書く。我的書(私の本)
d. 動詞・形容詞を名詞に変ずる助辞。得とも書く。走的快(歩くことが速い)
e. 人をいふ意に用ひる。送信的(郵便配達夫)
f. 了に同じく過去の時を示す助辞。畢的学(卒業した)
g. 副詞に添へる助辞「に」。地とも書く。一直的(まっすぐに)
h. 動詞の下について受身の意をあらわす助辞。児子死的(子に死なれた)

以上のような⑹の記述は，⑸のような記述とは異なって，日本語における中国俗語文学の「－的」の「意味機能」に関する認識を端的に示すものだと思う。その中でも特に⑹eでは「的」を代名詞或いは名詞のように記述していることが確認できる。このことは，他の多くの文献や辞書記述にも認められる(《人名または人を表す語[7]》《人名の一部を取って，的を用いる[8]》《明治中期ごろ人をさして的と云った時代に(あの人をあのてきと云った風に)[9]》)。しかし，中国俗語文学における「的」は名詞或いは代名詞だとは言いがたい[10]。ちなみに⑹の記述に対して，堀口(1992)は以下のように述べた。

⑺…… a～eはこのように並べられているが，b・cの連体用法のものが基本であり，その下の名詞を省略した用法としてa・e・dがあるというべきではなかろうか。外にgの連用用法があり，別にf・hの動詞などに付く用法があるわけである。

(堀口1992:62)

凡例) a～dのような記号は稿者によって，本論文の記述に合わせたものである。

以上，『大漢和辞典』と『日本国語大辞典』，また本論文における調査における⑸e・⑹e・⑺のような「－的」の用法をまとめると以下⑻のようである。

⑻**a. 中国語―慣用化された用法**（『大漢和辞典』）
送信的(郵便配達夫)，拉車的(車夫)，写字的(字を書く人)，売花的(花売り)，做買売的(商売人)
b. 日本語―近世，語性が変わった用法（本稿における調査）

の「－的」に該当する。
7)『日本国語大辞典』における「－的」に関する記述参照。
8) 山田(1961)における「－的」に関する記述参照。
9) 小阪時雄(1950)「露店考証」における「－的」に関する記述(前田1960:80)。
10) 前田(1960)は，明・清時代の「的」は現代の中国語よりも用法が多かったが，「－的」の語基は単独　実体名詞で，しかもそれ自身すでに人の意をもつ語にも「的」を付けるというような用法はないと述べ，中国俗語文学と日本語における「－的」の用法の違いに関して言及した。

官的(官吏･官員)，ニヤン的(芸者)，土左的(土左衛門)，地獄的(淫売婦)，泥的

c. 日本語―近世，語性が変わった用法（『日本国語大辞典』）

若的(若旦那)，酔的(酔っぱらい)，貧的(貧乏)，頓的(軽率な者)，彼的(あの男)，丸的(銭)

凡例) 括弧は解釈で，一部は稿者による。

まず，(8)aにおける「的」の多くは「～する人」であって，その語基は動詞が殆どである。一方，(8)b・cは，一部例外はあるものの，殆どが「～である人」で，一般名詞や人名などに「的」が付され，まるで「的」が名詞のように使われる場合が多いことが分かる[11]。

つまり，**a)**近世･明治初期における一部の「的」がまるで代名詞或いは名詞のように認識されている点，また**b)**語基として一般名詞や人名などが付されている点など，中国俗語文学と近世･近代初期における「－的」には認識の差があったと考えられる。稿者はこれを中国俗語文学における「－的」が日本語に受容された際に語性が変わったためだと解釈する。

(9)**江戸末期**(『通俗醒世恒言』(寛政2年)における「－的」)

a. (その人のこと或いはその職業をしている人を表す)**名詞的用法**

－中年的ハ(名詞)，我的ノ(代名詞)，幸的ヲ(人名)，猿テキで(名詞)，車力テキハ(職業)

b. (ある物事の性格・性質或いはある動作が行われる状態を表す)**副詞的用法**

－遠々的ニ(副詞)，噹的ニ(擬声語)

朱柏智(1991：63・70)

一方，朱柏智(1991)では江戸末期の『通俗醒世恒言』における「－的」の用法を調査して，(9)のように，「－的」には“名詞的用法”と“副詞的用法”があると述べた。ここで，(6)の八つの中国俗語文学における「－的」を，(9)などを参考にして，それぞれの用法によってまとめると以下のような四つの用法になるが，これが近世日本における「－的」に関する認識・理解であったと考えられる。

(10)**a.「連体用法1」(6)b･c**

b.「連体用法2」「その下の名詞を省略した用法」**(6)a･d･e**

c.「連用用法」(6)g

d.「その他(動詞など述語に付く用法)」**(6)f･h**

ここでさらに，当時において中国俗語文学における「－的」が，どのように解釈されたかに関して少し触れてから論を進めたい。

(11)a.「低」「**的**」「地」ハ三字トモニ，物ヲ指ス辞ナリ。倭語ニ，カウ/₩シタノデゴザル，カウ/₩アルノヲナニ/₩トシテトイフ，此ノ「ノ」ヽ仮名ニ，アタルナリ。雅語ノ，「者」ノ字ト

11)『新橋雑記』における「－的」の用法参考(李長波2006：78-79)。

a. 「~者」の意　　b. 「~だ/用言の終止用法」の意　　c. 「~スル的ノ~」

相似タリ。此ノ三字，元来一字ナリ。　　『訂校・訓訳示蒙』明治14年(1881)巻五29・オ

b. 俗語，何…的…ト使フコト。陶冕曰，低ヨリ地ヘ転シ，地ヨリ的ヘ転スルモノナリ，低地的ノ三字一義ナリト。余按スルニ又見的怪的ナリ的ハ得ノ字ノ意ナリ。見得リ怪得リノ義トシテヨクスムナリ。又老的少的這様的解事的ナトノ的ハ者ノ字ノ心エテヨクスムナリ。白駒云，訳ヒロシ句ノ中間ニ有トキハ之字ノ心ナリ句脚ニ有トキハ者ノ字ノ心ナリ又指辞アリ設ル辞アリ助字ニアルトキアリトテモト訳ス語勢ヲ以テ訳スルナリ。

『俗語解』長沢規矩也氏蔵本・第三冊(自ソ至テ)・テノ部

『唐話辞書類集』昭和49年(1974)，第10集434頁

c.「俗語助字」　　コノ下ニ載ル所ノ助字ハ，小説俗語ノ字ニテ，雅文ニ入ベカラズ。勿論皆出処アレトモ，小説ノコトナレハ，挙引スルニ及ハズ。只二三ノ熟語ヲ録シ，俗訳ヲ附シテ，初学ニ示ス。

『助語審象』文化14年(1817)巻下45・オ

的(テキ)　マサニ　ダト訳ス：成精的バケモノダ，組鹵的ラチモナイ，老実的リチギ，有的アリタケ，腌月賛的キタナヒモノダ，出名的ゼンセイ，呼呼欸乃的シツシサア/₩，流水的スラ/₩ト ……

『助語審象』文化14年(1817)巻下43・ウ

近世日本において，中国俗語文学における「-的」の用法は，(6)と(9)のように解釈され，以後の日本語における「-的」の根底の概念になったと考えられる。しかし，堀口(1992)も指摘するように，(11)bの「語勢ヲ以テ訳スルナリ」をみると，当時は「-的」の「意味機能」を把握するのが容易ではなかったことが推測できる。また，『復軒雑纂』の記述をみると，「-的」に《あっても無くてもよい字》とあり，《語勢ヲ以テ訳スルナリ》のように，「的」の意味の解釈が混乱していたことが分かる。

続いて堀口(1992:60)は，a)白話小説で「-的」における「的」の訓読は「テキ」であったと推定されること，b)句中[12]では例外なく「的」に「ノ」或いは「カ」が付されていることを指摘した。また「-的」の句脚[13]の用法ではまれに「モノ」と記した例があり，副詞の用法には「ニ」が付されて読まれていたのが確認できると述べた。その詳しい用例は以下のようである。

(12)a. 不レ別下(イトマゴヒセズ)這些ノ求ル二詩畫ヲ一的ノ朋友ニ上　　(一･4･オ)

b. 進二了城ニ一，到リ二邦ノ熱閙(ニギヤカナル)的ノ所在ニ一(トコロ)，　　(一･4･オ)

c. 六十来(バカリ)歳的ノ老児，　　(二･2･ウ)

d. 邦ノ老児把テ二身上的ノ雪児ヲ一抖フルヒ浄メ，　　(二･2･ウ)

e. 豈是老漢的カ本念ナランヤ。　　(二･15･オ)

『小説三言』(1976)：『小説奇言』宝暦3年(1753)　　**凡例**）左ルビは括弧表記。

(13)a. 香燭之類モ，也タ要レスル二備ンヲ一的(モノナリ)　　(一･3･ウ)

b. 凡来テ喫レスルレ酒ヲ的(モノ)，偶然(タマ／＼)身邊銀銭欠少，ナルトキハ　　(二･1･ウ)

c. 誰知ン倪善継与二做爹的一(オヤタルモノ)，　　(三･8･オ)

12) (11)b：…… 句ノ中間ニ有トキハ，之字ノ心ナリ，……　　『俗語解』長澤規矩也氏蔵本

13) (11)b：……句脚ニ有トキハ，者ノ字ノ心ナリ……　　『俗語解』長澤規矩也氏蔵本

d. 親族中ノ年長知レ事ヲ的(コトナレタルモノ)，準備シテ上リ前シテ見レ官ニ。　(三･24･ウ)
e. 若シ果然トシテ(ハタシテ)有ハレ此，即使(タトヒ)万金ナリトモ，亦是兄弟的ナリ　(ヲト／＼ガモノ)
(三･27･ウ)

『小説三言』(1976)：『小説奇言』宝暦3年(1753)　**凡例**）左ルビは括弧表記。

(14)a. 邦ノ人撰的ニ(ハタト)一交シ(フミチガヘ)，跌テ(コケ)在ニ雪裏ニ一　(二･2･ウ)
b. 只得(センカタナク)慢慢的ニ(ソロ／＼ト)捱シ去テ罷了　(二･3･ウ)
c. 把レ被ヲ(フトン)没頭没脳的ニ(スツポンカブリニ)蓋下ス。　(二･9･ウ)

『小説三言』(1976)：『小説奇言』宝暦3年(1753)　**凡例**）左ルビは括弧表記

以上の近世，中国俗語文学の「-的」における認識をまとめると，表4のようになる。

表4　近世における「－的」の用法

記号	中国俗語文学における「－的」の用法			近世の解釈･翻訳	言語区分	意味記述
	(10)		(6)			
Ⓐ	連体用法	連体用法1	b	(11)a・b 句中用法 (12)	大漢和	接続の助辞「の」
					日本語	連体修飾「～の」
Ⓑ			c		大漢和	所有のあらわす助辞「の」
					日本語	所有格「～の」
Ⓒ		連体用法2	a	(11)a・b 句脚用法 (13)	大漢和	形容詞に添へる助辞「もの」
					日本語	～という物･事
Ⓓ			e		大漢和	人という意に用ひる
					日本語	～である人
Ⓔ			d		大漢和	動詞･形容詞を名詞に變ずる助辞
					日本語	「－的」名詞或いは名詞扱い
Ⓕ	連用用法		g	(11)bドテモ (14)	大漢和	副詞に添へる助辞「に」の役割
					日本語	語幹連用･「－的＋ニ」連用
Ⓖ	その他		f	(11)c ダト訳ス	大漢和	了に同じく過去の時を示す助辞
					日本語	
Ⓗ			h		大漢和	動詞の下について受身の意をあらわす助辞
					日本語	

凡例 1)「大漢和」は『大漢和辞典』　2) その他(動詞など述語に付く用法)

つまり，近世において中国俗語文学の「-的」は主に(6)と(9)のように解釈されたが，基本的にはその解釈が容易ではなかったと考えられる。よって，この分かりにくい「的」の「意味機能」を明らかにするために，中国俗語文学の「-的」を訓読･翻訳するに際して「的」に「仮名」を下接するか，附訓した((12)「**連体用法1**」には“**ノ･カ**”･(14)「**副詞用法(連用用法)**」には“**ニ**”，(13)「**連体用法2**」には“**モノ**”)。このような“仮名”は，明治期に至っても，同じように「-的」と共に翻訳語に使われ，その事実上の「意味機能」を担うことになり，明治期テキストにおける「-的」の用法の確立に大きな影響を与えることになる。ここで本稿では，近世における中国俗語文学における解釈或いは翻訳を「-的」の「a-原型」とし，近世日本語に受容された「-的」を「a'-借用」とする。

また，3.3節でさらに詳しく述べるが，以上のような「-的」の起源になる近世末・明治初期における「-的」の用法をみれば，初期の「-的」には現代日本語における“形容動詞”のような用法とは距離がある(8)のような用法(本論文では，それを「残存用法」と呼ぶことにする)が多数存在していることが分かる。つまり，「-的」は“形容動詞”として生まれたのではなく，何らかの用法おける変容が起きて後に“形容動詞”のような用法が発達したことになる。

3.2「－的」における翻訳語の影響

本節では明治期テキストを翻訳書と非翻訳書に二分し，両者における「-的」の用法を比較して，「-的」における翻訳語の影響を検証する。

表5　明治期―翻訳書及び非翻訳書における「－的」の用法別用例数(延べ語数)

用法 / 時代	装定									述定			㋕	計
	連用用法			連体用法					計	㋖	㋗	計	その他	
	㋐ ニ	㋑ 語幹	計	㋒ ナ(ル)	㋓ ノ	㋔ 語幹	㋕ その他	計		語幹	その他			
①明治元-9	**1**	0	1	**1**	**16**	**1**	0	18	19	**1**	**1**	2	0	21
②明治10-19	19	**2**	21	3	11	**4**	0	18	39	3	0	3	**7**	49
③明治20-29	91	14	105	11	193	579	**9**	792	897	27	56	83	13	993
④明治30-39	42	13	55	27	22	439	2	490	545	26	32	58	5	608
⑤明治40-5	97	11	108	55	41	314	7	417	525	50	32	82	54	661
計	**250**	**40**	**290**	**97**	**283**	**1337**	**18**	**1735**	**2025**	**107**	**121**	**228**	**79**	**2332**

凡例) 表5における太線部は，今回の調査における各用法の初出時期を表す。

表6 明治期―非翻訳書のみにおける「－的」の用法別用例数(延べ語数)

用法 / 時代	装定									述定			㋕	計
	連用用法			連体用法					計	㋖	㋗	計	その他	
	㋐ ニ	㋑ 語幹	計	㋒ ナ(ル)	㋓ ノ	㋔ 語幹	㋕ その他	計		語幹	その他			
①明治元-9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
②明治10-19	0	0	0	0	**2**	0	0	2	2	0	0	0	0	2
③明治20-29	**88**	**14**	102	**10**	**185**	**534**	**7**	736	838	**24**	**51**	75	**13**	926
④明治30-39	18	3	21	11	4	172	2	189	210	13	24	37	5	252
⑤明治40-5	78	10	88	49	37	296	6	388	476	42	32	74	54	604
計	184	27	211	70	228	1002	15	1315	1526	79	107	186	72	1784

凡例1) 表6における太線部は，今回の調査における各用法の初出時期を表す。

2) 表5と6のにおける比較で，翻訳書と非翻訳書における「－的」の各用法の発生時期を類推できる。

2.3節であげた調査資料における「-的」の用例を2.4節の(3)のように分類すると以上の表5のようになる。さらに，そこで“翻訳書”におけるデータだけを除いて純粋な“非翻訳書”における「-的」の用法のみの分布と推移をまとめると以上の表6のようになる。

まず，表5と表6を見れば，全ての「-的」の用法において，翻訳書が先行していることが確認できる。非翻訳書には①･②期において，述定･「-的+ノ」連体用法(以後，「ノ」連体用法)の2件を除くと，他の用法が1件も見られない。これは，明治期における「-的」の使用拡大が，主に翻訳書によって牽引されたということを意味する。

また，多くの先行研究によれば「-的」は，近代に至って英語の「~tic」などの翻訳に多く使われて，広まったという。広田(1969)・李長波(2006)も以下(15)のような『復軒雑纂』の記述を紹介したが，先行研究によると，実は河津祐之など，『復軒雑纂』に言及された人物の著書では「-的」が見られなかったという。しかし，今回この記述を検証するため，『復軒雑纂』に言及された人物による翻訳書を調べた結果，(16)・(17)と表7のような結果が得られ，『復軒雑纂』における記述を実際に検証することができた。

(15) 明治維新の初に，何でもかでも，西洋々々で飜訳流行の時があッた，
諸藩で大金を出して，洋楽書生に，何原書でも，飜訳させた，其頃，拙者が知ッて居る人々で，善く飜訳をして居たは，柳河春三，桂川甫策，黒沢孫四郎(**河津祐之**の事)，箕作奎五(菊池大麓君の兄さん)，**熊沢善庵**，其他，某々等であッて，拙者なども，加はッた，さうして，不思議な事に此仲間が，大抵支那の小説，水滸伝，金瓶梅などを好んで読んで居た。或る日，寄り合ッて雑談を始まッた。其時，一人が，不図，かやうな事を言ひ出した。Systemを組織と訳するはよいが，systematicが訳し悪くい，ticといふ後加(アトクハ)へは，小説の的(テキ)の字と，声が似て居る，何んと，組織的と訳したらば，どうであろう。 … 中略 … 後には，何んとも思はず，遣ふやうになッて，人も承知するやうになッたが，其根を洗へば，ticと的が，声が似て居るからといふ事で，洒落に用ゐた丈の事で，実に捧腹すべき事である。是れが，的の字のそも/₩の原因である。
『復軒雑纂』大槻文彦，明治35年(1902)(復刻版2002：250-252)

(16) 河津祐之
a. 時ハ今少シク革命的ノ所置ヲナスヘシト命シケリサレバ ……
河津祐之『仏国革命史･3巻』明治9年(1876)11頁
b. 之ヲ妨ケサル限リハ可成的此ニ接近シテ之ヲ実際ニ適用セサル可カラサル者トシ且ツ其意義ヲ限定シテ其何成的ト称スルハ人民既ニ此理論ノ要スル所ノ自由ヲ享受スルニ足リ ……
高橋達郎訳･**河津祐之閲**『政府権限論』明治17年(1884)

(17) 熊沢善庵
其理ハ若シ能ク甲的ノ乙的ニ向テ生スル返鳧ヲ識ル時ハ亦乙的ヲ把テ甲的ニ対スルモ自ラ同返鳧ヲ得ヘキカ故ナリ ……
熊沢善庵『化学分析表』明治12年(1879)

表7 『復軒雑纂』の翻訳家グループによる「－的」の用法

時代＼活用	装定				述定・その他	計
	連用用法		連体用法			
	㋐ニ	㋑語幹	㋒ノ	㋓語幹		
①明治 元-09	1	0	16	1	2	20
②明治10-19	2	2	4	0	4	12
計	3	2	20	1	6	32

(18) **調査を行った『復軒雑纂』の翻訳家グループによる翻訳書(稿者による無作為選択)**

『蚕種説』**柳川春三**訳，明治2年(1869)

『器械撮説1・2』(巻1・2・3)大島長四郎訳・**桂川甫策**閲，明治8年(1875)

『仏国革命史』巻3，**河津祐之**訳，明治9年(1876)

『化学分析表』**熊沢善庵**訳，明治12年(1879)

『政府権限論』高橋達郎訳・**河津祐之**閲，明治17年(1884)

『代数学』**熊沢善庵**訳，明治20年(1887)

また，「-的」が使われた上記のテキストは，今回調査を行った他のテキストより比較的早い時期のもので，『復軒雑纂』の記述をさらに支える根拠になる。

最後に，詳しい用法に関する考察は次節で行うが，このような明治期の翻訳書による「-的」の使用拡大は，「a'-借用」の影響を受けつつ，(8)のような残存用法と共存しながら行われた点を言及しておきたい。本稿ではこのような近代初期以後(以下，明治初期)における「-的」を「b-過渡」とする。

3.3「－的」の日本語化

これまでの「-的」における中国俗語文学と翻訳書の影響による「-的」の受容・用法変遷を簡単にまとめると，❶「a-原型」❷「a'-借用」❸「b-過渡」といった三つのプロセスに区切ることが出来る。

まず，❶「a-原型」における「-的」は，(8)a・(12)(13)(14)のような近世期流行した白話小説など中国俗語文学における「-的」の訓読か，近世におけるその日本語翻訳である。このような「-的」は，近世日本語において(6)(9)(10)のように認識・解釈されたが，曖昧であったその「意味機能」を明らかにするために"ノ・カ"・"ニ"・"モノ"などの仮名が付された場合が多かった。

次に，この❶「a-原型」における「-的」は，近世日本語において**a)** 語性が変わるか，それとも**b)** 一部が「残存用法」としてそのまま受けつがれた用法(仮名が付された「-的」，(19))になるが，このような用法が❷「a'-借用」における「-的」である。

(19)「その客(きやく)を無文的(むもんてき)の漢(かん)と，友だちとさゝやいて…」

『浮・鎌倉諸芸袖日記・四[14]』七・ウ

凡例) ちなみに『古語大辞典』(小学館)によると，無文的の漢に「一文ナシノ男」という注釈あり。

14) 八文字自笑・八文字其笑『諸芸袖日記1～5之巻』寛保3年(1743)
早稲田大学図書館蔵(『デジタルライブラリー』)

さらに本稿では，この❶「a-原型」・❷「a'-借用」の両時期における「－的」には，中国語から日本語へという「一次翻訳」が行われ，「語幹＋的＋仮名(活用)」という形式が形成されたと判断する。

またこのような「－的」は，西洋文献を翻訳するに際して新たな抽象的な概念の翻訳語として多く使わるようになるが，この時期が❸「b-過渡」である。この時期における用法はまず，❷「a'-借用」の影響を受けて「ノ」連体用法，「ニ」連用用法((4)a2㋓・(4)a1㋐)が先行している。それに，❶「a-原型」の用法((4)c㋕)も残存用法として多数残っている。しかし，その中でも以前とは違った新しい用法((4)a1㋑・(4)a2㋒・(4)a2㋖)も生まれた。本稿では，この❸「b-過渡」における「－的」には，西洋文献の翻訳書による「二次翻訳」が行われ，新語が多数生まれると同時に新たな「－的」の用法も生まれたと判断する。

以上，発生期における「「－的」の日本語化」の流れに関して簡単に述べたが，このようなプロセスが「－的」における研究に資する点を簡単に述べてから論を進めたい。

まず「－的」は，長い時間をかけて，二回にわたって翻訳の過程を経て変容を繰り返し成立した。中国俗語文学やその翻訳において多様な意味で使われた「－的」は，近代に入りさらに抽象的で広い意味領域を持つ語を翻訳するに際して多く用いられた。そのため，「－的」の意味領域は自然に広がったと考えられる。また，その意味は文脈，語構成(前部要素)，また被修飾語など，多様な要因によって変わるなど，個別的である。さらに，「－的」の用法にはその発生から今に至るまで，新しい用法と残存用法が共存し，新旧用法が重層的な構造を成している。

従って，稿者はこのように多様で広い意味領域を持つ語の個々の意味を羅列する方法に疑問を持つ。そこで稿者は，「－的」を考察するに際して，「－的」の用法における通時的な変遷を視野に入れながら，文全体の中での「－的」の意味と機能を中心に考察する必要があると考える。つまり，「－的」の「用法・活用」の分析に基づく「意味機能」の考察である。

3.3.1 明治期における「－的」の連体用法

本節では，明治期全般のテキストにおける「－的」の用法，その中でも主に連体用法の変遷を中心に分析し，いかなる過程を経て「－的」が日本語化されたかに関して実際の用例をもって詳しく考察する。

まず，明治期「－的」の用法における最も大きな変化は，㋔語幹連体用法と，㋒「ナ(ル)」連体用法の増加である。

表8　明治期における「－的」の「連体用法」

活用 / 時期	延べ語数 ㋒ ナ(ル)	㋓ ノ	㋔ 語幹	㋕ その他	計	% ㋒ ナ(ル)	㋓ ノ	㋔ 語幹	㋕ その他	計
①	1	16	1	0	18	6	89	6	0	100
②	3	11	4	0	18	17	61	22	0	100
③	11	193	579	9	792	1	24	73	1	100
④	27	22	439	2	490	6	4	90	0	100
⑤	55	41	314	7	417	13	10	75	2	100
計	97	283	1337	18	1735	6	16	77	1	100

凡例) 四捨五入で，合計が100でない場合もある。

表8をみると，②期[15]には①期[16]の「ノ」連体用法が連体用法の多数を占めている。しかし，いわゆる「現代的な用法」である㋑語幹連体･㋐「ナ(ル)」連体用法は，徐々に増加し，③期になるとその数値が逆転することが分かる(図1参照)。

つまり，「-的」の日本語化が進み，日本語独自の「現代語的な用法(㋐㋑)」が発達したという流れを確認できる。またこれは日本語における言文一致の時期を考慮すると，③期から動きが始まって，④期になると「-的」が本格的に“形容動詞”のように扱われたと考えられれる。

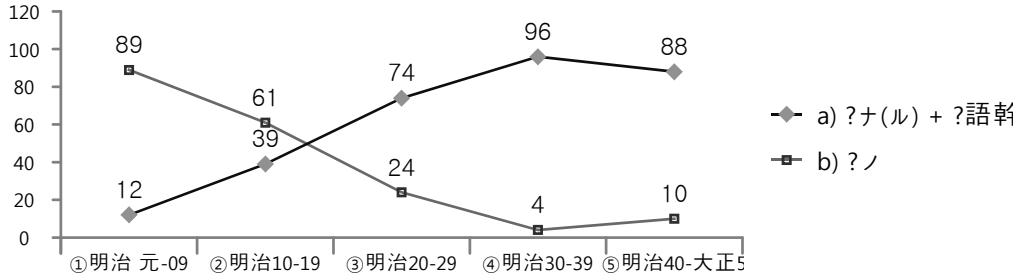

図1 明治期「－的」連体用法の変遷(%)

凡例1) 図1は表8における連体用法の変遷を表したものである。

2) 凡例“a)”は表8における㋐「ナ(ル)」連体用法と㋑「語幹」連体用法の合わせた数値の変遷である。

3) 凡例“b)”は，㋓「ノ」連体用法のみの数値の変遷である。

さらに，早い時期における㋐用法は「語基＋的＋ナル＋被修飾語」という形式をとっている。しかし，④期になると現代日本語における“形容動詞”と同じく「語基＋的＋ナ＋被修飾語」のような形式が現れ始める。㋐用法の時期別の形式変遷は以下図2のようである。

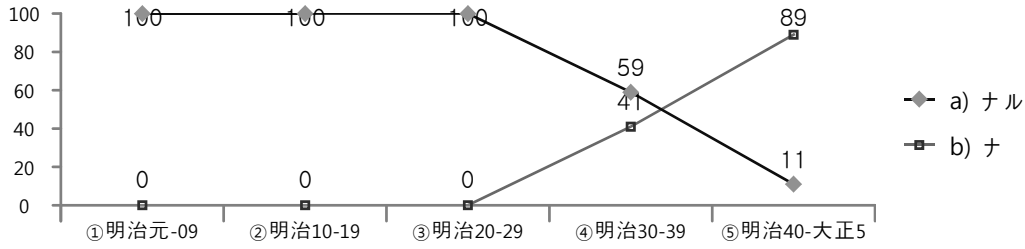

図2 ㋐における「－的＋ナ」と「－的＋ナル」の形式変遷(%)

凡例) 図2は，表8における㋐「ナ(ル)」連体用法のデータを，「－的＋ナ」と「－的＋ナル」といった二つの形式にそれぞれ分離し，その数値の推移の変遷を表したもの。

15) 3.3節の❸「b-過渡」期にあたる。
16) 3.3節の❷「a'-借用」期にあたる。

以上図2によると，㋐「－的＋ナ(ル)」用法が量的に急増した⑤期は，その用法における形式が「－的＋ナル」から「－的＋ナ」へ移行したのことが分かる。

つまり，明治期「－的」の連体修飾における主な変化は，連体修飾における文法標示であった「ノ」連体用法の減少と新たな「ナ」連体用法の増加(「ナル」連体用法の減少を含め)であると言えよう。これは，本論文では取り上げてない連用用法や述定用法における考察が終わってから言える事ではあるが，暫定的に考えると「－的」の用法は“形容動詞”[17]の用法に近づいていると言える。

本稿では，③～⑤期を「－的」の日本語化における❹「c-安定」期とする。これは，❸「b-過渡」期の旧用法をその「新用法」が圧倒し，「－的」が現代日本語の用法，つまり「現代語的な用法」に近づいたことを意味する。

しかし，前述したように，「－的」には残存用法という純粋な“形容動詞”とは相違する用法が存在する。堀口(1992)は，語基の性格が非状態性の名詞らしいものである場合，「－的」は終止用法をもたないと述べ，“形容動詞”と「－的」との違いに関して指摘した。また，「－的」は「形容動詞語幹＋的(健康的・自然的・平和的)」の語構成が可能であるなど，「－的」は純粋な形容動詞であるとは判断しがたい。従って本稿では，このような「－的」を「一般形容動詞」とは異なる「擬似形容動詞」であるといい，「－的」の品詞性に関してさらに考察する必要があると考える。

4. おわりに

以上，本稿では，近世から明治期のテキストにおける「－的」の用例を検討し，「－的」の日本語化を考察した。「－的」は中国俗語文学と西洋文献の翻訳書の影響によって日本語に受容されたと指摘し，「－的」を通時的に「a-原型」「a'-借用」「b-過渡」「c-安定」期に分類した。また，「－的」の連体用法の変遷を中心に考察を行い，「－的」が「一般形容動詞」とは異なる「擬似形容動詞」である可能性があると指摘した。

今後は，本稿における考察を踏まえて，「－的」の連体用法と連用用法，また述定用法を加えてさらに検証を行いたい。また，これまでは「－的」における巨視的な側面から考察を行ったが，これからは個別語における語基と用法の分布など，微視的な側面からの考察も行いたい。それによって，「－的」の各用法の変遷過程や発生原因，また，「－的」の品詞性がより明らかになると考える。

17) 但し，ここでの「形容動詞」は，「語幹＋的＋(ナ)」のような形式の連体修飾用法を持つ語に限定する。

5. 参考文献･使用テキスト[18)]

5.1 参考文献

浅井真慧･深草耕太郎･坂本充(1997)「「的を得た」は的を射ているか--第7回ことばのゆれ全国調査から(2)」『放送研究と調査』47(5)，日本放送出版協会：52-61

畔上道雄(1971)「内村鑑三と畔上賢造」『思想の科学』119号：72-87

磯邊彌一郎(1906)「国文に及ぼせる英語の感化」『文章世界』1巻8号，日本近代文学館：5-15

遠藤織枝(1984)「接尾語『的』の意味と用法」『日本語教育』53号，東京大学国語国文学会：125-138

大槻文彦著・鈴木広光校注(2002)『復軒雑纂1―国語学・国語国字問題編』平凡社(大槻文彦(1902)『復軒雑纂』の復刻版)

尾形仂解説(1976)『小説三言』：『小説奇言』(1753)

影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房

朱柏智(1991)「接尾語「―的」の歴史的研究―明治期を中心に―」『甲南女子大学大学院論叢』13号，「論叢」の会：62-73

高橋勝忠(2005)「「的」論考」『英文学論叢』49号，京都女子大学英文学会：1-22

長澤規矩也解題(1974)『唐話辭書類集』第10集：『俗語解』長澤規矩也氏蔵本・第三冊(自ソ至テ)

広田栄太郎(1969)「的という語の発生」『近代訳語考』東京堂出版

藤居信雄(1957)「的という言葉」『言語生活』71号，筑摩書房：71-76

藤居信雄(1961)「的の意味」『言語生活』119号，筑摩書房：80-83

中村幸彦編(1985)『近世白話小説翻訳集』全13巻中・4巻：石川雅望訳(1790)『通俗醒世恒言』馮夢龍編，寛政2年

堀口和吉(1992)「助詞「－的」の受容」『山邊道』 第36号，天理大学国文学研究室

前田勇(1960)「『てきや』という語」言語生活100号，筑摩書房

松井利彦(1987)「漢語の近世と近代」『日本語学』第6巻･第2号，明治書院：25-36

松本萬年(1878)『新橘雑記』1・2編

水野義道(1987)「漢語系接辞の機能」『日本語学』第6巻･第2号，明治書院：60-69

三宅邦(橘園三宅)口授(1817)『助語審象』巻之下，菱屋孫兵衛(京都御幸町御池通下ル)，早稲田大学古典籍総合データベース(請求記号:ホ04 00057)

山下喜代(1999)「字音接尾辞「的」について」『日本語研究と日本語教育』森田良行教授古希記念論文集刊行会，明治書院：24-38

山下喜代(2000)「漢語系接尾辞の語形成と助詞化―「的」を中心にして」『日本語学』19(13)

山田巌(1961)「発生期における的ということば」『言語生活』120，筑摩書房：56-61

楊超時(2009)「日本語の「－的」と中国語の“～的”について―通時的観点からの一考察―」『外国語研究』第10号，大東文化大学大学院外国語学研究科：129-144

吉川幸次郎他(1979~1981)『漢語文典叢書』全6巻中1巻：『訂校・訓譯示蒙』明治14年(1881)

李秀卿(1998)「明治･大正期の「－的」の性格　-形容動詞化機能の定着過程-」『文学研究論集9号』明治大学大学院文学研究科編

---

18)　“全集類”或いは“複数の著作を集めた物やシリーズ”は太字で表記した(e.g.『唐話辭書類集』『明治期翻訳文　学書全集･イギリス文学編』『小説三言』など)。

李長波(2006)「近世，近代における「～的」の文体史的考察」『DYNAMIS』10号，京都大学大学院人間・環境研究科：68-89
廖小梅(1996)「「～的」語形の評価義試論」『専修国文』第58号，専修大学国語国文学会：73-89

5.2 使用テキスト

【翻訳テキスト[19]】

『明六雑誌 復刻版』第1号～第20号（1998）相川仁童，大空社
『西国立志編 改訂版』(1877) 中村正直訳，木平讓
『自助論』(1907) 畔上賢造訳，内外出版協会
『自助論』(1912) 小山内薫･中村徳助共譯，日進堂書店
『明治期翻訳文学書全集･イギリス文学編』中一部(1998) 国立国会図書館，大空社，CD-ROM
斎藤了庵「魯敏孫全傳」デフォー，明治5年(1872)
永峰秀樹「暴夜物語」Geo.Flyer Townsend，明治8年(1875)
山田正隆「回世美談」デフォー，明治10年(1877)
『明治翻訳文学全集』全20巻中一部(2003) 川戸道昭他編，大空社
坪内逍遥「春風情話」SCOTT, Sir Walter, bart，明治13年(1880)
坪内逍遥「開巻悲憤／慨世士伝　はしがき」Edward George Lytton，明治18年(1885)
黒岩涙香「婚姻」William Makepeacd Thackeray，明治23年(1890)
森田思軒「西文小品（旅行の説）」Bacon, Francis，明治24年(1891)
_____「西文小品（費の説）」Bacon, Francis，明治24年(1891)
坪内逍遥「雷小僧」William Harrison Ainsworth，明治25年(1892)
森田思軒「滑稽氏」Angel, James Burrill，明治25年(1892)
_____「不思議の後家」Angel, James Burrill，明治25年(1892)
原抱一庵「湖畔妖物」Collins, Wilkie，明治25年(1892)
益田克徳「夜と朝」Edward George Lytton，明治26年(1893)
坪内逍遥「扇子使用法の練習」Joseph Addison，明治26年(1893)
森田思軒「一シリング銀貨の履歴」Joseph Addison，明治26年(1893)
_____「千人会」Maria Edgeworth，明治 26年(1893)
坪内逍遥「ジョセフ，アヂソンの散文」Joseph Addison，明治 28年(1895)
_____「心の解剖」Joseph Addison，明治 30年(1897)
上田敏「四季賦」Marvell, Andrew(マアヱ゛ル)，明治 34年(1901)
森噲峰「モルモン奇譚」Doyle, Arthur Conan, Sir，明治 34年(1901)
上田敏「夜のけはひ」Stevenson, Robert Louis，明治 35年(1902)
_____「小曲，恋の王座」Rossetti, Dante Gabriel，明治 35年(1902)
_____「春の潮」Browning, Robert，明治 35年(1902)
小山内薫「恋の葬」Tennyson, Alfred Tennyson, Baron，明治 35年(1902)
_____「むなしき月日」Rossetti, Christina Georgina，明治 35年(1902)

19) 時代順(翻訳者/タイトル/原作者/翻訳年度)

原抱一庵「食人会」Mark Twain，明治 36年(1903)
_____「該撒惨殺事件」Mark Twain，明治 36年(1903)
_____「紳士」Mark Twain，明治36年(1903)
_____「助言」Mark Twain，明治36年(1903)
_____「無政府党と一夜」Doyle, Arthur Conan, Sir，明治36年(1903)
_____「無音の瀑」Doyle, Arthur Conan, Sir，明治36年(1903)
_____「稀有の裁判」Doyle, Arthur Conan, Sir，明治36年(1903)
_____「造人術」Louise J. Strong，明治36年(1903)
_____「名曲「愛禽」」Maria Edgeworth，明治36年(1903)
_____「庭園の快楽」Collins, William Wilkie，明治36年(1903)
上田敏「女の眼に映するこよなきもの」De Quincey, Thomas，明治36年(1903)
押川春浪「新アラビヤンナイト」Stevenson, Robert Louis，明治36年(1903)
_____「王女の旅」Shakespeare, William，明治36年(1903)
上田敏「心情」Yeats, W. B. (William Butler)，明治38年(1905)
佐藤紅緑「何も言へぬ」George Bernard Shaw，明治42年(1909)
小山内薫「砂時計」Yeats, W. B. (William Butler)，明治42年(1909)
森鷗外「戯曲／馬盗坊」George Bernard Shaw，明治43年(1910)
松居松葉「二十世紀」George Bernard Shaw，明治44年(1911)
『明治文化全集』8巻中一部(1992)復刻版，日本評論社
鈴木唯一「英政如何」Fonblanque, Albany de Grenier，明治元年(1868)
緒方正「西洋開拓新説」ラウドン抄訳･スチーブンス補，明治3年(1870)
山田貢一郎･村田文夫「西洋家作雛形」シー･ブリュース･アルレン著，ジョン･ウヰーネル増補，明治5年(1872)
西江舎主人「航海夜話」ヘンレイ･ピツチングトン，明治5年(1872)
渡部温「通俗伊蘇普物語」James thomas，明治6年(1873)
永峰秀樹「開巻驚奇暴夜物語」タヲンスンエンド，明治8年(1875)
_____「代議政體」Mill, John Stewart，明治8年(1875)
丹羽純一郎「歐洲奇事花柳春話」Edward George Earle Lytton，明治11年(1878)
未詳(著者の弟子)「大森介墟古物編」Edward Sylvester Morse，明治12年(1879)
金子堅太郎「政治論略」Edmund Burke，明治14年(1881)
文部省編輯局「主勸論」Hobbes, Thomas，明治16年(1883)
石川千代松筆記「動物進化論」Edward Sylvester Morse，明治16年(1883)
井上勤「人肉質人裁判」William Shakespeare，明治16年(1883)
坪内雄蔵(坪内逍遥)「該撒奇談自由太刀餘波鋭鋒」William Shakespeare，明治17年(1884)
服部誠一「泰西活劇春窓綺話」スコット，明治17年(1884)
木下新三郎「仇結奇の赤繩西洋娘節用」William Shakespeare，明治19年(1886)
石川千代松「百工開源」ジエー･ジー･ウード，明治19年(1886)
河島敬蔵「露妙樹利戯曲春情浮世の夢」William Shakespeare，明治19年(1886)
竹内余所次郎「一名西洋歌舞伎種本」Lamb Charles，明治19年(1886)

『明治文化全集』26巻中一部(1992)復刻版，日本評論社
明石博高 口述･竹岡友仙 筆記「防雷鍼略説」明治6年(1873)
宇田健斎「物理了案」明治12年(1879)
呉秀三「脳髄生理精神啓微」明治22年(1889)
「精神病者の書態」明治25年(1892)
松本順口授･窪田昌筆記「蘭疇」明治35年(1902)
『近代デジタルライブラリー』(http://kindai.ndl.go.jp/)
「蚕種説」(1869) 柳川春三訳，Karmarsch著，吉田屋(東京)，近代デジタルライブラリー
「鞋補童教学」(1873) 佐橋富三郎訳，Simuel Smiles，近藤四良兵衛等(京都)，近代デジタルライブラリー
「器械撮説1」巻1･2 (1875) 大島長四郎訳･桂川甫策閲，一貫堂(東京)，近代デジタルライブラリー
「器械撮説2」巻3 (1875) 大島長四郎訳･桂川甫策閲，一貫堂(東京)，近代デジタルライブラリー
「仏国革命史-3」(1876) 河津祐之訳，Mignet，Francois-Auguste-Marie-Alexis著，加納久宣(東京)，近代デジタルライブラリー
「化学分析表」(1879) 熊沢善庵訳，丸屋善七(東京)，近代デジタルライブラリー
「春風情話」(1878) 橘顕三訳(坪内逍遥の筆名)，SCOTT, Sir Walter, bart著，中島精一，近代デジタルライブラリー
「政府権限論」(1884) 高橋達郎訳･河津祐之閲，テオドル･ウーセー著，岡島支店(東京)，近代デジタルライブラリー
「開巻悲憤／慨世士伝　はしがき」(1885) 坪内逍遥訳，Edward George Lytton著，晩青堂発兌
「代数学」(1887) 熊沢善庵，トドハンター著，嵩山堂(東京)，近代デジタルライブラリー

【非翻訳テキスト】

『諸芸袖日記』1～5之巻(1743)八文字自笑･八文字其笑，早稲田大学図書館･古典籍総合データベース，寛保3年
『哲學字彙』(1881) 井上哲次郎他，東京大学
『哲学字彙 訳語総索引』(1979) 飛田良文編，笠間書院
『朝日新聞戦前紙面データベース』(2001～2002) 東京朝日新聞社，CD-ROM
『讀賣新聞』(1999～2002) 読売新聞社メディア企画局データベース部，CD-ROM
『婦人畫報･臨川書店編集部編』(2004～2005) 臨川書店編集部，臨川書店，DVD-ROM
『婦人公論』(2006) 臨川書店編集部，臨川書店，DVD-ROM
『太陽コーパス』(2005)雑誌『太陽』(1895-1928)日本語データベース，国立国語研究所，博文官新社，CD-ROM
Self-Help－With illustrations of Character－(1869) Samuel smiles, Conduct, And Perseverance. John Murray
『明治期国語辞書大系[普]』1～12巻 (1997)：「語彙」「漢英対照いろは辞典」「ことばのはやし」「和漢雅俗 いろは辞典」「日本辞書 言海」「日本大辞典」「増訂二版 和漢雅俗 いろは辞典」「日本大辞林」「日本新辞書」「帝国大辞典」「日本新辞林」「ことばの泉」
『近代文学大系』『近代評論集I』全評論110件(タイトル省略)(1972)
『青空文庫』(http://www.aozora.gr.jp/)
「慶応義塾新議」(1869) 福沢諭吉，青空文庫，明治2年
「學問のすすめ」(1872) 福沢諭吉，青空文庫，明治5年

「中津留別の書」(1872) 福沢諭吉，青空文庫，明治5年
「京都學校記」(1872) 福沢諭吉，青空文庫，明治5年
「學者安心論」(1876) 福沢諭吉，青空文庫，明治9年
「旧藩情」(1877) 福沢諭吉，青空文庫，明治10年
「教育の目的」(1879) 福沢諭吉，青空文庫，明治12年
「経世の学，また講究すべし」(1882) 福沢諭吉，青空文庫，明治15年
「徳育如何」(1882) 福沢諭吉，青空文庫，明治15年
「物理学の要用」(1882) 福沢諭吉，青空文庫，明治15年
「學問の独立」(1883) 福沢諭吉，青空文庫，明治16年
「武蔵野」(1887) 山田美妙，青空文庫，明治20年
「ことばのうみのおくがき」「言海」(1891) 大槻文彦，青空文庫，明治24年
「新女大学」(1899) 福沢諭吉，青空文庫，明治32年
「修身要領」(1900) 福沢諭吉，青空文庫，明治33年
「瘠我慢の説(1月)」(1901) 福沢諭吉，青空文庫，明治34年
「瘠我慢の説(5月)」(1901)福沢諭吉･勝海舟･榎本武揚，青空文庫，明治34年
『新潮文庫の100冊』(1995)新潮社版・新潮社製作，CD-ROM
「たけくらべ」(1895) 樋口一葉，新潮文庫の100冊，新潮文庫，明治28年
「高野聖」(1900) 泉鏡花，新潮文庫の100冊，新潮文庫，明治33年
「破戒」(1906) 島崎藤村，新潮文庫の100冊，新潮文庫，明治39年
「野菊の墓」(1906) 伊藤左千夫，新潮文庫の100冊，新潮文庫，明治39年
「悲しき玩具」(1910) 石川啄木，新潮文庫の100冊，新潮文庫，明治43年
「遠野物語」(1910) 柳田国男，新潮文庫の100冊，新潮文庫，明治43年
「こころ」(1914) 夏目漱石，新潮文庫の100冊，新潮文庫，大正3年
「高瀬舟」(1916) 森鷗外，新潮文庫の100冊，新潮文庫，大正5年
『近代デジタルライブラリー』(http://kindai.ndl.go.jp/)
「洋算用法 2篇」(1870) 鷲尾卓意(保)著，柳河春三(日敦)閲，大和屋喜兵衛(東京)，近代デジタルライブラリー，明治3年
「化学新論問答」巻1 (1875) 宇都宮三郎･桂川甫策述，加藤宗吉記，一貫堂(東京)，近代デジタルライブラリー，明治8年
「英仏百年戦記」(1876) 河津祐之，松栢堂(東京)，近代デジタルライブラリー，明治9年

〈 요 지 〉

「－的」의 일본어화(日本語化)

본고에서는 메이지기(明治期) 전반에 걸친 한어계접미사(漢語系接尾辞) 「-的」의 연체용법(連体用法)의 변천을 중심으로 고찰하여, 「-的」이 중국어로부터 도입되어 일본어화(日本語化)되어가는 과정을 개관해 보았다.

우선 근세(近世)·근대(近代) 초기에 찾아볼 수 있는 「-的」의 실제 용법을 중국속어문학(中国俗語文学)의 용법과 비교하여, 그 영향을 고찰하고 그와 관련된 「-的」의 용법을 자세히 정리했다. 그리고 메이지기(明治期)의 텍스트를 크게 번역서(翻訳書)와 비번역서(非翻訳書)로 나누고, 각각의 텍스트에서 찾아볼 수 있는 「-的」의 용례를 그 용법에 따라 고찰하는 것을 통해, 서양문헌의 번역서에 의한 영향과 각각의 용법에 관해서도 살펴보았다.

본고에서는 이와 같은 고찰을 통해 「-的」의 용법의 변천을 알아볼 수 있었으며, 이를 기준으로 해서 근세 말기(近世末期)부터 메이지기(明治期)에 이르는 시대를 「a-원형(原型)」, 「a'-차용(借用)」, 「b-과도(過渡)」, 「c-안정(安定)」과 같이 네 개의 프로세스로 구분할 수 있었다. 그리고 일본어의 「-的」의 용법은, 중국 속어문학(中国俗語文学)으로부터 차용되어, 메이지기(明治期)를 거치면서 중국속어문학(中国俗語文学)의 훈독(訓読) 및 번역(翻訳), 그리고 서양문헌西洋文献의 번역어(翻訳語) 등, 다양한 요인에 의해 비로소 일본어화(日本語化)되었다는 것을 알 수 있었다. 다시 말하자면, 「-的」은 발생 당시부터 "형용동사(形容動詞)"로서 일본어에 도입된 것이 아니라, 근세말(近世末)부터 메이지기(明治期)를 거치면서 "형용동사(形容動詞)"처럼 변용(変容)된 단어(單語)이며, 따라서 자연히 순수한 형용동사(形容動詞)와는 상이한 용법을 다수 갖게 되었다고 할 수 있다. 본 논문에서는 이와 같은 성격을 가지는 「-的」을 「의사형용동사(擬似形容動詞)」라고 하여 일반 형용동사(一般形容動詞)와 구분하여 부르기로 한다.

논문분야 : 어휘론(어구성)・문법(통어론)
키 워 드 : 적(的), 「-적(的)」의 발생, 형용동사(形容動詞), 한어계 접미사(漢語系接尾辭), 의사형용동사(擬似形容動詞)

▣ 김유영(金曄泳)
오사카대학 박사후기과정
yuiyu1004@gmail.com・http://www.japanese.or.kr

■ 投 稿 日 : 2010년 11월 30일
■ 審査開始 : 2010년 12월 29일
■ 審査完了 : 2011년 2월 10일
■ 掲載確定 : 2011년 3월 4일